

親しい友人に対する自己開示と大学生生活満足度の関連

野土谷真弓・西谷 健次

概 要

本調査は根本・西尾（2001）の「自己開示と大学生生活満足度」に着目して調査を行った。まず、自己開示と大学生生活満足度の関連が男性にもいえるのかという点をみるため、男女別に自己開示程度を低群・高群に分け、各満足度と分散分析を行った。その結果、男女共に友人関係満足度に有意差がみられたが大学生生活満足度にはみられなかった。つまり、自己開示の程度と大学生生活満足度には関連がないということであり根本・西尾（2001）と違う結果であった。次に、大学生生活満足度に影響を与えている要因をみるために、大学生生活満足度と各満足度、親しい友人に対する自己開示との相関係数を求めた。その結果、女性は友人関係満足度、男性はサークル・部活動満足度が大学生生活満足度が一番影響を与えていた。しかし、自己開示と各満足度の相関をみると、女性は親しい友人への自己開示が友人関係満足につながり、それが大学生生活の満足につながっていた。男性は自己開示が友人関係満足につながり、友人関係満足がサークル・部活動の満足につながり、大学生生活満足度につながっていた。これは自己開示は直接的には大学生生活満足度とつながらないが、各満足度を介して大学生生活満足度に影響を与えているといえる。

1. 問題と目的

自己開示（self-disclosure）とは、榎本（1997）によれば、「自分がどのような人物であるかを他者に言語的に伝える行為」であると定義している。言語的に伝える行為には、言って伝える、書いて伝える、表情で伝えるなど様々な方法があるが、自己開示研究では言葉で伝える点に注目して対話場面での会話に限定することが多い。

自己開示には、開示内容に「何を」にあたる広さと「どこまで」にあたる深さが存在する（榎本，1997）。深い内容の自己開示は、自身にとって否定的・弱点になる内容、社会的に望ましくない側面のものであるとされている（榎本，1997）。開示する自己の深さは、相手との親密度によって異なり、一般的には初対面の人よりも、親しい人のほうがより深い自己開示が行われる（丹羽・丸野,2010）。また、何を開示するかも相手との関係性により異なり、これも深さと同様に、一般的には初対面の人より親しい人の方がより広い範囲の自己開示が行われる（榎本，1997）。

自己開示は心的健康や適応と関連しており、このことは多くの研究で指摘されている（和田，1995；岡田，2006）。小野寺・河村（1999）は中学生を対象とした調査を行い、自

己開示が学級生活での満足感と関連していることを示している。さらに、根本・西尾（2001）では大学生を対象とした調査の結果、親しい友人に自己開示できているほど学校生活を円滑に過ごせることを示している。相互的に自己開示することで他者と親密な人間関係を築くことができ、それが学校生活の満足感に繋がっていると考えられるからだ。「不登校」や「ひきこもり」などは、親密な人間関係を築くことへの不適応ともいえ、その意味でも、自己開示に基づく人間関係への着目は重要な問題であると考えられる。

根本・西尾（2001）は榎本（1997）の作成した項目に表現上の修正を加えたものを用いて自己開示と大学生生活満足度との関連を調査している。対象は女子大学生であり、大学内での親しい友人への自己開示の程度、親しい友人からの自己開示の程度の測定、大学生生活の満足、友人関係の満足を測定した。その結果、ほとんどの学生が親しい友人へ十分に自己開示できており、自己開示程度と友人関係・大学生生活満足度の関連については、その中でも特に親しい友人へ自己開示できるほど友人関係・大学生生活満足度は高いことが示された。

根本・西尾（2001）は女子大学での調査であり、男子大学生については調査していない。また、満足度において友人関係に注目してはいるが測定しているのは大学生生活満足度であり、満足度に影響を与えると考えられる学習面やサークル・部活動など他の側面についても調査していない。そこで、本調査では女子学生のみでなく男子学生にもデータを取り、男性においても親しい友人に対する自己開示と大学生生活満足度は関連があるのか。また、大学生生活満足度に影響を与える要因を調査することを目的とした。

2. 方法

調査対象者

S大学の学生 309名（人間文化学部 男45名 女59名・経営学部 男68名 女13名・女子短期大学部 女124名）

質問項目

調査では、質問紙法を用いた。自己開示に関わる質問項目は根本・西尾（2001）で使用していた16項目に加え、ダミー項目として「好きな食べ物」、「履修について」の2項目を加えた。ダミー項目を加えたのは被験者がダミー項目において低い値を付けた場合、データが偏ることが考えられたからである。質問紙は3種類の質問で構成されている。質問内容と質問項目は以下の通りである。

1. 大学内の最も親しい友人への自己開示

質問項目は「自分の成績」「心をひどく傷つけられた経験」「理想の生き方」「自分の性格の短所」「外見に関する悩み」「身体健康上の悩み」「性に関する関心や悩み事」「大学での友人関係における好き嫌い」「大学での対人関係における悩み事」「過去の恋愛経験」「異性関係における悩み事」「好きな異性に対する気持ち」「どんな仕事をしたいか」「親に対する不満」「家族に対する心配事」「孤独感や疎外感を感じた時の気持ち」「好きな食べ物」「履修について」の18項目である。

2. 大学内の最も親しい友人からの自己開示

質問項目は1と同様である。

3. 学校生活、友人関係、学習、サークル・部活動の満足感

質問項目は「学校生活全般」「友人関係」「学習面」「サークル・部活動」の4項目である。

質問紙の構成

質問紙は表紙、2ページ目に大学内の最も親しい友人への自己開示、3ページ目に親しい友人からの自己開示、4ページ目に学校生活、友人関係、学習、サークル・部活動の満足感、5ページ目に学校生活の中で不満に思っていることの自由記述で構成されている。

調査手続き

1つ目の質問は大学内での最も親しい友人への自己開示であり、大学内で最も親しい友人をひとり思い浮かべてもらい、その友人に対してどのくらい自己開示できているかという質問である。それぞれの項目に「全て話せる」を5点、「ほとんど話せる」を4点、「かなりの部分話せる」を3点、「差し障りのない程度なら話せる」を2点、「あまり話せない」を1点、「まったく話せない」を0点として6段階で評定してもらった。

2つ目の質問は大学内の最も親しい友人からの自己開示であり、1の質問で思い浮かべた友人はどのくらい自分に自己開示してくれていると感じているかという質問である。評定は1と同様である。

3つ目の質問は学校生活、友人関係、学習面、サークル・部活動の満足感であり、学校生活、友人関係、学習、サークル・部活動にどのくらい満足しているかという質問である。それぞれの項目に5段階で評定してもらった。

授業開始時に質問紙を配布した。所要時間は約10分間であり、被調査者のペースをみて回収を行った。

調査時期

2010年9月～10月

3. 結果

3. 1 自己開示項目・各満足度の記述統計

質問紙で使用した自己開示測定項目の平均と標準偏差は以下の通りである。親しい友人への自己開示の記述統計は表1、親しい友人からの自己開示の記述統計は表2に示す。

表1. 親しい友人への自己開示の全項目と記述統計

項目	N	平均値	標準偏差
どんな仕事をしたいか	309	4.29	1.16
自分の成績	310	4.15	1.16
自分の性格の短所	310	4.08	1.29
理想の生き方	308	3.74	1.46
身体健康上の悩み	307	3.62	1.52
大学での対人関係における悩み事	309	3.61	1.46
外見に関する悩み	307	3.50	1.49
大学での友人に対する好き嫌い	310	3.47	1.56
過去の恋愛経験	309	3.44	1.67
親に対する不満	309	3.44	1.58
好きな異性に対する気持ち	309	3.41	1.63
異性関係における悩み事	310	3.36	1.61
家族に関する心配事	306	3.28	1.65
孤独感や疎外感を感じた時の気持ち	306	3.17	1.71
心をひどく傷つけられた経験	308	3.14	1.71
性に関する関心や悩み事	309	3.04	1.74
食べ物の好き嫌い	310	4.55	0.99
どの授業を履修するか	310	4.51	0.98

表2. 親しい友人からの自己開示の全項目と記述統計

項目	N	平均値	標準偏差
どんな仕事をしたいか	309	3.97	1.42
自分の成績	309	3.93	1.20
自分の性格の短所	309	3.70	1.44
大学での対人関係における悩み事	309	3.66	1.36
大学での友人に対する好き嫌い	309	3.60	1.42
理想の生き方	308	3.56	1.52
親に対する不満	308	3.49	1.49
身体健康上の悩み	308	3.47	1.56
好きな異性に対する気持ち	308	3.45	1.60
異性関係における悩み事	308	3.41	1.58
過去の恋愛経験	308	3.40	1.66
外見に関する悩み	308	3.37	1.54
家族に関する心配事	309	3.36	1.57
心をひどく傷つけられた経験	308	3.23	1.61
孤独感や疎外感を感じた時の気持ち	309	3.22	1.64
性に関する関心や悩み事	308	2.95	1.75
食べ物の好き嫌い	309	4.22	1.26
どの授業を履修するか	308	4.33	1.22

本調査ではダミー項目として「食べ物の好き嫌い」、「どの授業を履修するか」の2つを加え調査を行った。その結果、「食べ物の好き嫌い」の平均値は親しい友人への自己開示では4.55、標準偏差が0.99、親しい友人からの自己開示では平均値が4.22、標準偏差が1.26であった。また、「どの授業を履修するか」の平均値は親しい友人への自己開示では4.51、標準偏差が0.98、親しい友人からの自己開示では平均値が4.33、標準偏差が1.22と共に平均値が高く、標準偏差のばらつきも小さいことからこの質問項目は本調査で利用できるデータであるといえる。

記述統計の結果、親しい友人への自己開示、親しい友人からの自己開示は同様の傾向を示していた。ダミー項目以外で平均値が高かった項目は、「どんな仕事をしたいか」、「自分の成績」、「自分の性格の短所」であった。一番平均値が高かったのは、「どんな仕事をしたいか」であった。

平均値が低かった項目は「家族に関する心配事」、「心をひどく傷つけられた経験」、「性に関する関心や悩み事」、「孤独感や疎外感を感じた時の気持ち」であった。中でも平均値が一番低かったのは「性に関する関心や悩み事」であった。

親しい友人への自己開示と親しい友人からの自己開示の順位を見ると大きな違いはなく、

一番差が大きいのは「外見に関する悩み」であった。

質問紙で使用した各満足度測定項目は以下の通りである。各満足度の記述統計を表3に示す。

表3. 各満足度の全項目と記述統計

項目	N	平均値	標準偏差
大学内での友人関係全般	309	4.09	1.03
学習面全般	308	3.43	1.03
サークル・部活動	224	3.37	1.25
大学生活全般	306	3.67	1.02

各満足度の平均値では、「大学内の友人関係全般」が4.09と一番高い値であった。また、一番低い値だったのが「サークル・部活動」であり3.37であったが、サークル・部活動に所属している人数は224名と他項目より人数が少なかった。

3. 2 因子分析

親しい友人への自己開示、親しい友人からの自己開示尺度はどのような因子構造になっているのか検討するために、全18項目について主成分分析による因子分析を行った。親しい友人への自己開示測定尺度の分析結果を表4に、親しい友人からの自己開示測定尺度の分析結果を表5に示す。

表4. 親しい友人への自己開示測定尺度の因子負荷量

質問項目	因子	
	1	共通性
孤独感や疎外感を感じた時の気持ち	0.85	0.72
異性関係における悩み事	0.85	0.72
身体健康上の悩み	0.84	0.71
好きな異性に対する気持ち	0.84	0.70
大学での対人関係における悩み事	0.83	0.69
家族に関する心配事	0.83	0.68
過去の恋愛経験	0.81	0.65
外見に関する悩み	0.80	0.64
大学での友人に対する好き嫌い	0.80	0.64
性に関する関心や悩み事	0.80	0.64
理想の生き方	0.79	0.63
心をひどく傷付けられた経験	0.79	0.63
親に対する不満	0.79	0.62
自分の性格の短所	0.75	0.56
どんな仕事をしたいか	0.64	0.41
自分の成績	0.59	0.35
固有値	9.99	
寄与率(%)	62.45	

※小数第3位を四捨五入

表5. 親しい友人からの自己開示測定尺度の因子負荷量

質問項目	因子	
	1	共通性
外見に関する悩み	0.90	0.8
異性関係における悩み事	0.88	0.78
孤独感や疎外感を感じた時の気持ち	0.87	0.76
家族に関する心配事	0.86	0.73
理想の生き方	0.85	0.73
好きな異性に対する気持ち	0.85	0.73
自分の性格の短所	0.85	0.73
性に関する関心や悩み事	0.85	0.72
親に対する不満	0.85	0.72
身体健康上の悩み	0.85	0.72
大学での対人関係における悩み事	0.84	0.71
大学での友人に対する好き嫌い	0.83	0.68
過去の恋愛経験	0.82	0.67
心をひどく傷付けられた経験	0.80	0.63
どんな仕事をしたいか	0.72	0.52
自分の成績	0.72	0.52
固有値	11.17	
寄与率(%)	69.80	

※小数第3位を四捨五入

因子分析の結果、固有値の大きな落差はみられず、1因子構造であるとした。

3. 3 男女別にみた自己開示程度と各満足度の分散分析結果

男女別に自己開示得点を2.5を中心として低群・高群に分け、自己開示程度と各満足度

の差、性差をみるために二要因の分散分析を行った。

[自己開示程度と大学生生活満足度の分析]

親しい友人への自己開示程度と大学生生活満足度の記述統計を図1のA、親しい友人からの自己開示程度と大学生生活満足度の記述統計を図1のBに示す。

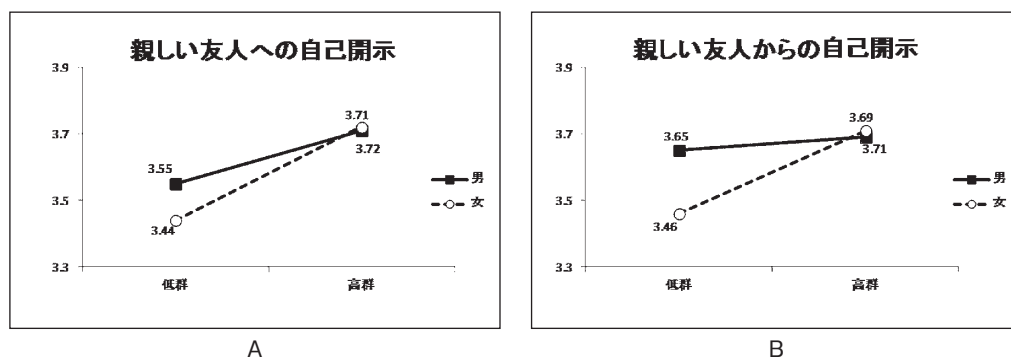


図1. 親しい友人に対する自己開示程度との大学生生活満足度

分散分析の結果、自己開示程度と大学生生活満足度には差がみられず、性差もみられなかった。つまり、親しい友人への自己開示、親しい友人からの自己開示程度と大学生生活満足度は共に関係がなく、男女差もないといえる。

[自己開示程度と友人関係満足度の分析]

親しい友人への自己開示程度と友人関係満足度の記述統計を図2のA、親しい友人からの自己開示程度と友人関係満足度の記述統計を図2のBに示す。

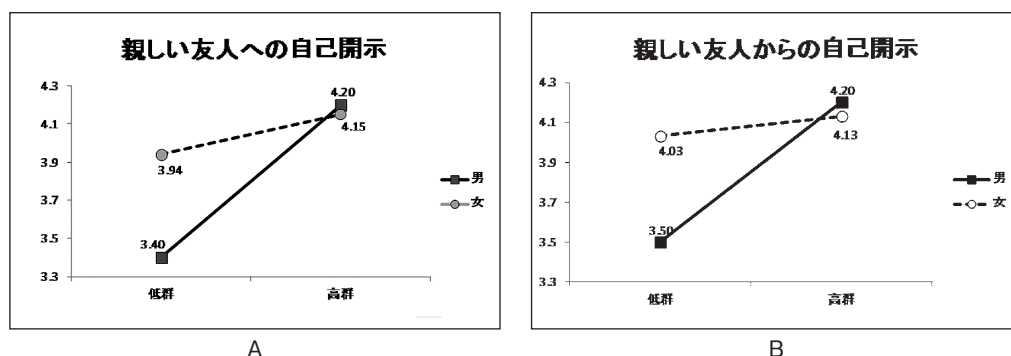


図2. 親しい友人に対する自己開示程度と友人関係満足度

分散分析の結果、親しい友人への自己開示程度と友人関係満足度には交互作用の有意差がみられた ($F=10.168, p<.01$)。また、親しい友人からの自己開示程度では、親しい友人

への自己開示と同様に交互作用の有意差がみられた ($F=4.010, p<.05$)。

つまり、親しい友人への自己開示できているほど、友人関係満足度が高いといえる。また、親しい友人から自己開示されていると感じているほど、友人関係満足度が高いといえ、男性の方が、影響を強く受けているといえる。

[自己開示程度と学習満足度の分析]

親しい友人への自己開示程度と学習満足度の記述統計を図3のA、親しい友人からの自己開示程度と学習満足度の記述統計を図3のBに示す。

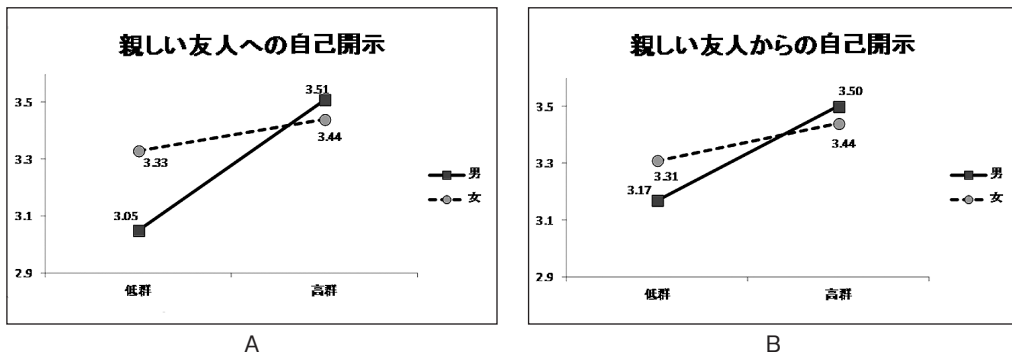


図3. 親しい友人に対する自己開示程度と学習満足度

分散分析の結果、親しい友人への自己開示、親しい友人からの自己開示程度と学習満足度には共に有意差がみられず、性差もみられなかった。

つまり親しい友人への自己開示程度と学習満足度は関係がなく、男女差もないといえる。

[自己開示程度とサークル・部活動満足度の分析]

親しい友人への自己開示程度とサークル・部活動満足度の記述統計を図4のA、親しい友人からの自己開示程度とサークル活動満足度の記述統計を図4のBに示す。

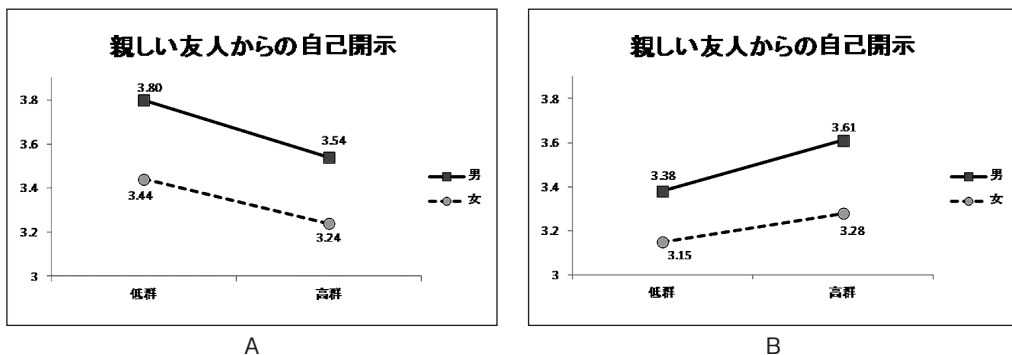


図4. 親しい友人に対する自己開示程度とサークル・部活動満足度

分散分析の結果、親しい友人へ・親しい友人からの自己開示とサークル・部活動満足度には共に有意差は見られず、性差もみられなかった。

つまり、親しい友人への自己開示程度とサークル・部活動満足度は関係がなく、男女差もないといえる。

親しい友人への自己開示、親しい友人からの自己開示と各満足度の分散分析の結果、自己開示程度で差がみられたのは友人関係のみであった。また、親しい友人への自己開示と友人関係満足度では性差がみられ、男性の方が強く影響を受けていた。

親しい友人に対する自己開示と友人関係満足度との間に関連が見られた理由として、自己開示は特に親しい友人との間でよく行われ、相互的な自己開示は親密な関係を築くことを促すと考えられる。そのため、親しい友人に対し、どのくらい自己開示できているかにより、友人関係満足も高くなるのだと考えられる。

3. 4 男女別にみた大学生生活満足度と各満足度・自己開示の相関係数

大学生生活満足度に影響する要因をみるために大学生生活満足度と各満足度、自己開示とのピアソンの相関係数を求めた。女性の大学生生活満足度と各満足度・自己開示の相関係数を表6に、男性の相関係数を表7に示す。

表6. 女性の自己開示と各満足度との相関

	友人関係	学習	サークル・部活動	大学生生活	親しい友人への自己開示
学習	.338**				
サークル・部活動	.132	.263**			
大学生生活	.558**	.365**	.411**		
親しい友人への自己開示	.176*	-.034	-.154	.086	
親しい友人からの自己開示	.123	-.053	-.012	.084	.824**

表7. 男性の自己開示と各満足度との相関

	友人関係	学習	サークル・部活動	大学生生活	親しい友人への自己開示
学習	.361**				
サークル・部活動	.325**	.338**			
大学生生活	.346**	.403**	.528**		
親しい友人への自己開示	.430**	.226*	.042	.113	
親しい友人からの自己開示	.413**	.226*	.084	.054	.807**

女性の大学生生活満足度と相関があったのは、友人関係・学習・サークル・部活動満足度であった。その中でも、友人関係満足度と大学生生活満足度には強い相関がみられた。男性の大学生生活満足度と相関があったのは、女子と同様に友人関係・学習・サークル・部活動満足度であった。男子学生においてはサークル・部活動満足度と大学生生活満足度に強い相関がみられた。また、男女共に、大学生生活満足度と親しい友人へ・親しい友人からの自己開示の間には強い相関はみられなかった。

しかし、親しい友人に対する自己開示と各満足度との相関をみると、女性では、親しい友人への自己開示と友人関係満足度との間に強い相関がみられ、男性においては、親しい友人へ・親しい友人からの自己開示と友人関係満足度、学習満足度との間に強い相関がみられた。

つまり、女性においては、自己開示と大学生生活満足度との間には関連がなかったが、親しい友人への自己開示が友人関係満足度につながり、また友人関係満足度が大学生生活満足度につながっているといえ、自己開示と大学生生活満足度は直接的にはつながらないが、友人関係満足度を介して関連があるといえる。男性においては、女性同様に自己開示と大学生生活満足度との間には関連がなかったが、親しい友人に対する自己開示が学習・友人関係満足度につながり、さらに、サークル・部活動満足度につながり、大学生生活満足度につながっていた。これも女性同様に、自己開示と大学生生活満足度は直接的にはつながらないが、学習・友人関係・サークル・部活動満足度を介して関連があるといえる。

4. 総合考察

本調査では、男性においても親しい友人に対する自己開示と大学生生活満足度は関連があるのか。また、大学生生活満足度に影響を与える要因を調査することを目的とした。

男性においても親しい友人に対する自己開示と大学生生活満足度は関係があるのかという点であるが、親しい友人への自己開示、親しい友人からの自己開示程度を低群・高群に分け、各満足度において自己開示程度、性差をみるために分散分析をした結果、友人関係満足度のみに有意差がみられた。親しい友人への自己開示では、開示程度で有意差がみられ、親しい友人からの自己開示では開示程度・性差で交互作用の有意差がみられた。つまり、自己開示できていると友人関係満足度が高くなるといえ、親しい友人からの自己開示では男性の方が自己開示と友人関係満足度の関連が強いといえる。男性の方が自己開示と友人関係満足度の影響を強く受ける要因として、男女のコミュニケーション・パタンの相違が考えられる。女性のコミュニケーションでは相互に言葉を交わす行為そのものが重視されるのに対して、男性では情報交換が重視されることを反映しているのではないだろうか。

大学生生活満足度に影響を与える要因をみるために、大学生生活満足度と各満足度・自己開示の相関係数を求めた。その結果、女性は友人関係満足度との間に強い相関がみられ、男性はサークル・部活動満足度に強い相関がみられた。また、ここでも親しい友人に対する自己開示と大学生生活満足度は男女ともに強い相関はみられなかった。

本調査の結果、自己開示と大学生生活満足度は関連がなく、女性は友人関係満足、男性はサークル・部活動満足が大学生生活満足に影響していた。しかし、自己開示と各満足度の相関をみると、女性は親しい友人への自己開示が友人関係満足度を介して大学生生活満足度へ、男性は親しい友人に対する自己開示が友人関係満足につながり、サークル・部活動を介し

て大学生生活満足度につながっていた。つまり、自己開示が直接的に大学生生活満足度につながるのではなく、各満足度を介して大学生生活満足につながっているといえる。相互的な自己開示は、相手と親密になることを促し、友人関係の満足につながると考えられる。そして友人関係に満足しているということが、大学生生活の満足につながるのではないだろうか。やはり親しい友人に対する自己開示は大学生生活満足において重要であると考えられる。

引用文献

- ・岡田努 1995 現代大学生の友人関係と自己像・友人像に関する考察 教育心理学研究, 43, 12-30.
- ・小野寺正己・河村茂雄 1999 中学生の自己開示が学級満足度に及ぼす影響についての考察 日本教育心理学会総会 発表論文集(41),441,1999-07-15.
- ・榎本博明 1997 自己開示の心理学的研究, 北大路書房.
- ・丹波空・丸野俊一 2010 自己開示の深さを測定する尺度の開発 パーソナリティ研究, 18(3), 196-209.
- ・根本橋夫・西尾佳奈 2001 大学における親友に対する女子大学生の自己開示 東京家政学院大学紀要,第41号.
- ・和田実 1995 青年の自己開示と心理的幸福感の関係 社会心理学研究11(1),11-17, 1995-09-15.